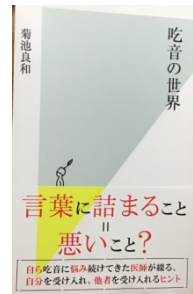


吃音の世界



写真は 2019 年 1 月刊行の光文社新書。表紙カバー裏から一吃音は、最初の語を繰り返す「連発」(ぼ、ぼ、ぼ、ぼくは)と、最初の言葉を引き伸ばす「伸発」(ぼーくは)と、言葉が強制的に発話阻害される「難発」(……ぼくは)の 3 種類がある。吃音症の人は 100 人に 1 人の割合で存在し、日本では約 120 万人、世界では約 7000 万人いると言われている。近年、吃音の専門教育を受けた国家資格である言語聴覚士の誕生、障害者の暮らしやすい社会へ向けた市民の意識の変化、そして発達障害者支援法や障害者差別解消法の成立といった時代の変化の中で、吃音者をめぐる状況にも変化が生じている。幼少期から吃音で悩み苦しんできた医師が、吃音の当事者のみならず、私たちがより多様な社会を生きるためのヒントを伝える。

著者は九州大学病院耳鼻咽喉・頭頸部外科助教として、日本で数少ない吃音外来も行っている。第 1 章「私の吃音体験」は、幼少期から吃音に悩み苦しんできた著者の体験がリアルに綴られる。その体験から吃音を研究する医師をめざし、26 歳の春に目標を達成する。吃音に 100 年以上もの研究の歴史があるという。吃音について、本書から初めて知ったことも多かった。

私も幼少期から高校生あたりまで、吃音(どもり)に悩まされてきた。著者の吃音体験を読んで、昔の苦しみが思い起こされる。本書のなかでも、「どもりは人真似から？」に注目した。1940 年 12 月 27 日の朝日新聞には、「どもりは伝染病 早期矯正が大切です」という見出しの記事があります。そこでは吃音の原因についてこう書かれています。「ドモリの原因は幼時にかかった疾患、百日咳や胃腸病がもとでおこることもありますが、大体は身近なところにいるドモリからうつることが多いのです。父親がドモリだったり、友達にドモリがいると、真似をしなくとも黙っていても、ドモリがうつることがあるのです。しかし、決して先天性なものではありませんから、早いうちに根治する必要があります」こうした記事から、当時は、「吃音の原因＝真似」というのが最も広く信じられていた考えであったことが見て取れます。

ここに注目したのは、幼いころの強烈な苦しみと関係があるからだ。近所の友だちのおばさんが、「明ちゃん(私)と遊ぶと、どもりがうつる」と話しているのを聞いたことがある。いつもは優しいおばさんなのに、どうして、そんなことを言うのか。すぐに家に帰り、押入れのなかで泣いたのを、今でも鮮明に覚えている。これ以降、友だちとの接し方も変化していったように思う。昔は「どもりは伝染病」「どもりはうつる」などと、私の幼いころまでは普通に考えられていたことを本書で知った。

「吃音の世界」は、私の人生とりわけ前半において大きな影響をもたらした。自分史をたどるうえで、吃音体験についても記憶を記録していきたい。

(2019 年 2 月 10 日)